視察レポート

当議会では、議員の資質を高め、政策提言につなげるべく年1回の視察研修を行っています。協議の結果、伊豆半島方面が視察先に選ばれ、発案者の木村議長が幹事となりました。

10月29日から31日まで、議員7名および事務局での視察となりましたが、議員各自の視点をご報告したいと思います。

▲全国でも希少となった「なまこ壁」と洋風のテイストを組み合わせたおしゃれな建物

観光・産業発展のための交流を！

青沼 弘

私は、議長・事務局長と共に、ひと足先に下田市に入り、下田市役所を表敬訪問し、市長と下田市議会の副議長と対談させていただいた。そのなかで下田ツアーの事が話題に上がり、近年実施できていない事を話したところ、「是非復活していただきたい」「下田市でも協力します」とのお言葉をいただいた。下田市からも、新島ツアーをはじめ職員や議員の視察研修を、という話もあった。

また、立ち寄った飲食店などで、「新島から来たんです」と言うと、とても温かく接していただき、「私達も是非新島に行ってみたい」と言っていた。

今後は、お互いに観光・産業等の発展の為に、交流し友好を深めていければと思う。

人を心地よくさせる町づくりとは？

吉見 一之

15年ぶりに訪れた下田港は、道の駅の完成を機に町ぐるみで観光に取り組んでいるような活気を感じた。その一端として、以前は閑散としていたペリーロード（条約交渉のためペリーが黒船から往来した）も街道に沿うように店舗が立ち並び、飲食店を中心に整備されていた。

整備されたといっても莫大な予算を投入して刷新したのではなく、予算をそれほどかけずに元々あったものをうまく利用し、当時の雰囲気を残しつつ、それぞれの店舗の個性を出している。

それぞれの建物は、ぱっと見は「古くて傷みがある」。しかし伝統的な白と黒を基調とした「なまこ壁」の雰囲気をそこかしこに残し、内部を綺麗にリフォームして使っている。以前のような魚介類中心の飲食店だけでなく、今ではイタリアンからハワイアンまで多岐に渡っている。

都会によくあるような「オシャレだけど押しつけ感があるデザイン」ではなく、「何か心地よい雰囲気」といった感じだ。こういったデザインセンスは、どうしたら身に付けられるのかと考えさせられる。

これは、最近のインスタ映えの文化にうまくマッチし、休日ともなれば、こぞって人が訪れていることだろう。古の文化であるペリーや土地の起源などをバックボーンに、町ぐるみで取り組んでいることがよくわかる。やはり古のストーリーがある場所は強い。土地に愛着を持った人々の努力はすごいと思った。

新島にもコーガ石やクサヤ、流人といった古の文化がある。もっと島の歴史を学び、新島の観光に活かそうと感じた。そして、自分自身も新島をもっと好きになろうと思った。うまく言えないけれど、この感覚が観光復活の鍵かもしれない。

「さじま」の遊覧船の可能性について探る！

富田 浩章

連絡船代船「さじま（定員40名 18t）」購入をきっかけに、議員の中で「遊覧船」復活の可能性はあるの？ というテーマが話題になった。

住民の皆さまの中には「赤にしき」を覚えている方もいらっしゃるかと思うが、村では、昭和50年代後半から昭和62年頃まで、白ママ断層＆式根島一周クルーズを実施していた（所要時間60分 大人1520円・子供810円）。結局、利用者が少なくなり中止となった経緯がある。

視察では「青の洞窟に出会う」で有名な堂ヶ島の遊覧船に実際に乗り、運行会社の方に内容や課題、津波対応や事故対策などを伺った。運行会社である「堂ヶ島マリン株式会社」は、遊覧船等7隻（定員43名～50名 9・1t～10t）を所有。周遊時間は20分で大人1500円・子供750円で、15名以上になれば随時運行している。

▲堂ヶ島マリンの遊覧船。伊豆半島を訪れる観光客の半分は遊覧船に乗船するという。

遊覧では奇岩に名前を付けて巡る他、メインの名勝「青の洞窟」の中に入っていく。時には遊覧船と岩までの距離が数十センチというシーンもあり、その操船技術に目を見張った。

さて、「さじま」の遊覧船の可能性を考えると、現在の船員数では休みが無くなり毎日運航は厳しい。手続きの手間や、「白ママ断崖」以外の名勝があるか？ といった課題も浮かび上がる。また、既存の民間事業者を圧迫することはできない。

では可能性はゼロか？ と言うと、「民間にはできない独自なメニュー」があれば可能ではないか。

例えば、サンセットクルーズ。チャーターでお酒でも持ち込み、飲みながら白ママ断層を観た後に太平洋に沈む夕日を船上から眺める。堂ヶ島の遊覧船の倍近い大きさの「さじま」だからできる企画。住民の皆さまにもアイデアがあるのではないか。

これからも新たな観光メニューを増やすことは大切。できない理由を考えるだけでなく、連絡船の営業も考え、可能性を探ることも面白いと考えさせられた遊覧船視察だった。

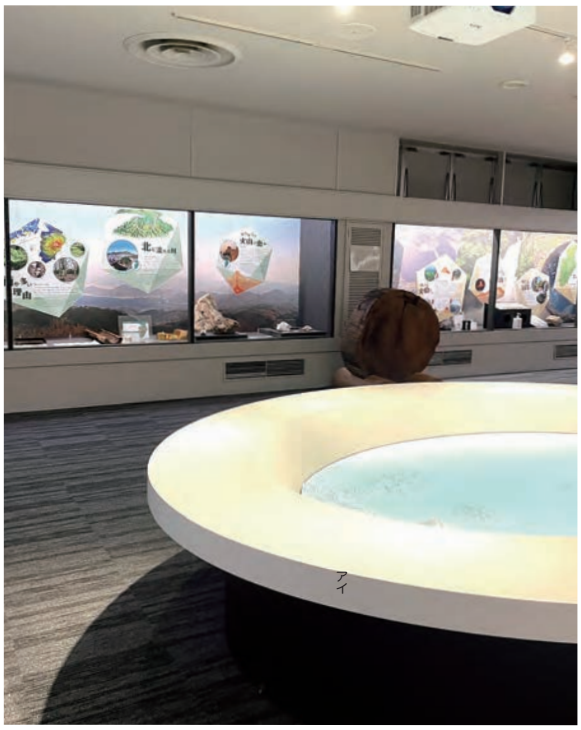
▲神秘的な青の洞窟（天窓洞）

ジオパークならぬストーンパーク

小久保 利佳

今回の伊豆半島視察で何度も耳にしたジオパーク。ジオパークとは、地球科学的価値のある大地の遺産を景観保全し、教育やツーリズムに活用しながら、持続可能な開発をする地域認定プログラムであり、そのエリアのこと。伊豆諸島では大島が2010年9月に日本ジオパークに認定された。

伊豆半島は2012年に日本ジオパークに認定されてお



▲伊豆半島の成り立ちをビジュアルで解説するシアター

り、伊豆半島ジオパークミュージアム・ジオリアでは、伊豆半島の大地の成り立ち・地質・地形の不思議を、大型スクリーンやプロジェクション、模型や顕微鏡などを使って分かりやすく解説。『伊豆半島ジオパーク』の面白さを目で見て触れて体感して学べる施設になっている。

新島村もジオパークとしてのポテンシャルを充分持ち合わせており、ジオパークになる可能性は感じたが、地域がジオパークになるには要件がいくつかある。審査や更新に再認定の調査・手続きもあり、簡単ではない。特にガイドや運営に関わる人材が大きな課題となるだろう。新島村の規模に合わせてジオパークの仕組みをリサイズして活用することの方がより現実的ではないだろうか。新島村が誇るべきコーガ石。村内にはコーガ石の建造物が散見され、まさに島全体が博物館だ。新島版ジオパーク「ストーンパーク」としてオリジナルにプログラムするのは面白そうだ。

あったらいいな、島のガイド

前田 勝利

2018年、日本で9番目のユネスコ世界ジオパークに認定された伊豆半島。火山の軌跡を美しい風景として今に留めている。

今回の視察は主に下田・松崎・西伊豆・修善寺の豊かな自然環境、歴史文化遺産などを「伊豆半島ジオガイド協会」所属のガイドさんに案内いただいた。初めて訪れた地方の風景、史跡、風物などを見聞したり体験したりするとき、ガイドによる案内はその魅力を総括的に知ることができる。とっておきの情報などは地元のガイドだからこそ知っているのだと思う。

現在、新島・式根島には組織的なガイドはない。羽伏浦海岸、コーガ石、泊海岸、海中温泉、流人、大踊などの文化遺産、魅力的な観光資源は多いが、遊泳、サーフィン、釣り、温泉などで訪れる観光客の皆さまには、まだまだ知らない島の魅力があるのではと感じている。魅力あふれる新島・式根島をより詳しく紹介するガイドがあれば観光客の誘致に一役買うのではと思う。

▲ジオガイド養成講座を修了し認定試験に合格したガイド会員が100名以上いるという。

近くて、遠い伊豆半島

大沼 由美子

晴れた日には新島から富士山の頂きさえ目視、愛でることができる伊豆半島。海路45㎞、約3時間の距離である。静岡県から東京都へ移管されて久しい今でも、伊豆諸島の呼称が東京諸島と同様に観光面でも現役である。

令和6年度新島村議会視察先には、新島のこれからの観光振興策において、規模はかなり異なるものの多々の類似点がある下田市～南伊豆・西

伊豆を選んだ。

冒頭、新島から目視できて「近い」認識の伊豆半島は、実はかなり遠かった。海路ではわずか45㎞だが、フェリー「あぜりあ」の就航率を考慮して、東京に前日入り。翌朝、特急踊り子号にて2時間40分で下田へ。日頃、小さな離島で生活する身からすると、バスで移動する伊豆半島の広大さを含め、揺るぎない日本開国の地としての下田の歴史や、新島のコーガ石同様地元の生活に浸透している伊豆石など、行く先々で圧倒された視察であった。

初日はあいにくの荒天、雨風の中の行軍であったが、下田市を中心にほぼスケジュール通りに視察し、新島のこれからの観光振興策の参考になる具体例等について学べた。すでに観光地としての地位は確立し、毎年黒船祭りをはじめ、通年多くの観光客が訪れている下田市は、古い家並みであってもどこか魅力的で、再度訪れてみたくなる雰囲気に満ちていた。

翌日～最終日は天気も回復し、南伊豆、西伊豆へ。今回は初日の下田からお世話になった、伊豆半島ジオガイド協会会長の仲田女史（西伊豆町議会の副議長）のガイドが驚くほど秀逸で、ゼミに参加する学生のごとく一言一句に聞き入った。

すべての行程も無駄がなく、個々の観光スポットも訪れる価値があった。

最後に「下田市～南伊豆・西伊豆視察」について当然規模的、歴史的要素においては比べる対象ではないにしても、観光振興策の基本や新島サイズのジオガイドの育成あるいは伊豆半島と伊豆諸島の連携等の可能性を大きく感じた視察であった。

▲雨の中、下田船乗り場からペリーロード周辺を伊豆下田アウトドア・自然体験案内所しーもんの青木ガイドと散策。

▲伊豆半島ジオガイド協会の会長を務め、西伊豆町議会副議長でもある沖田会長(写真後ろ左から二番目)直々のガイドに感謝。

今回の視察を実施するにあたり、多くの方から多大なるご尽力をいただきました。視察全体の企画と手配、ジオリア館内見学のご案内をいただいた一般社団法人美しい伊豆創造センターの皆さま、ガイドや窓口対応の他、観光についてさまざまなアイデアをいただいた伊豆下田アウトドア・自然体験案内所「しーもん」の皆さま、松崎町・西伊豆町にて終日ガイドをしてくださった伊豆半島ジオガイド協会の仲田会長、特別なクルーズを手配していただいた堂ヶ島マリン株式会社の皆さま。下田市長・副議長を始め、下田市庁舎・市議会の皆さまにも温かく迎え入れていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。（視察幹事：木村 諭史）

伊豆石の採石場から石の町並みへの展望は？

木村 諭史

今回の伊豆半島南部の視察では、伊豆石を用いた町並みを体感したのちに、その採掘場を訪れることをメインのコースと決めていた。一方、伊豆半島全体で伊豆石の採石場はいくつもあることと、ジオパーク関連からの紹介があるものの、一般的な観光地としてはまだそれほど知られていないこともあり、訪問先を特定するにも苦労した。

実際に行ってみて、それもそのはず道路脇からかなりの傾斜を海側に下って視察先の室岩洞が現れた。垣根堀とよばれる技法で洞内を掘り進めていくため、まさに迷路のようなトンネル状になっており、観光というより冒険であった。洞内は時間限定でライトアップされ、内部には地底湖のようなスポット、屋外の露天掘りの絶壁、急勾配を使って石を下ろし、海から搬出したという遺構（表紙写真参照）など見どころが盛りだくさんだった。

特に当村でも活用できそうな点が、当時の採掘風景を模した石像と、切り出した石の実寸大のサンプルだった。また今回の視点を借りれば、①採石場での地域の地質・当時の繁栄、②伊豆石を活用した町並み、③山から町や、素材の変化を含めた一貫性のある"もの語り"ができることが象徴的だった。

当村の場合は、向山火山と採石場の紹介、街中での説明はもちろん、島の砂やガラスといった素材を含めた一貫性のある説明、リフトやトロッコによる石の搬出方法などロマン溢れる物語を展開できると確信した。説明パネルを含めて一体感ある知見と観光意識の醸成が必要と感じた視察となった。

▲伊豆石の石切り場

▲石切り場での展示

▲ペリーロードでの石の町並み

Webサイト工事中のおしらせ

新島村議会ウェブサイトでは、過去の「議会だより」バックナンバーの整理と、議会の最新情報を活動ごとにまとめて読めるよう作業を進めています。

「議員と一緒に考える会」や、児童らの議会体験レポートなども掲載予定です。作業が完了するまではご不便をおかけしますが、ご了承のほどよろしくお願いいたします。